

やすだ のぼる
安田 登
 能楽師（下掛宝生流：ワキ方）
 寺子屋 講師 （阿弥陀寺）
 こどもおばけ合宿 講師 //

主著に『論語』『あわいの時代』『あわいの時代の『論語』ヒューマン2.0』
 『能 650年続いた仕掛けとは』他多数。

こままたとき 聖人の 親鸞鳥



イラスト 中川 学

漢詩としての「正信偈」

『源氏物語』です。さまざまな現代語訳も出ていますし、マンガにもなっています。でも、

この和歌は有名ですね。そして、この和歌より有名なものもなしと思へば。『源氏物語』が書かれたのはいまから千年以上も前。平安時代の中期です。有名な人といえば藤原道長。「この世をば我が世とぞ思ふ 望月の欠けたることもなしと思へば」

今年の大河ドラマ、ご覧になっていきますか。『源氏物語』を書いた紫式部の生涯を描く「光る君へ」です。『源氏物語』が書かれたのはいまから千年以上も前。平安時代の中期です。有名な人といえば藤原道長。「この世をば我が世とぞ思ふ 望月の欠けたること

もなっています。でも、それらを読もうと思った方は、その大きさに驚くでしょう。全五十四帖です。長い…。

さらに、そんな世界に誇る物語を書いたのは、なんと女性である紫式部なのです。すごいでしょ。当時も、政治は男性が牛耳っていました。しかし、文化の面では紫式部だけでなく、『枕草子』を書いた清少納言もいましたし、和泉式部などの女性歌人もたくさんいて、当時の文化は女性が活躍

それらを読もうと思った方は、その大きさに驚くでしょう。全五十四帖です。長い…。古典のまま読むのはムリ、現代語訳でもなかなか読了しないし、マンガで読むのも大変です。それもそのはず。『源氏物語』は、世界で最初の長編小説なのです。こんな長い物語を千年以上も前に、しかも世界で最初に作ったのが日本人なのです。

してました。ちよっと余談ですが、この平安時代は「死刑」もない時代でした。平安時代がずっとなかったわけではなく、死刑がなかったのは八一〇年から一一五六年までの約三五〇年間。

正確にいえば死刑の「制度」はありませんが、死刑は執行されず、天皇の特別の命令によって、刑一等を減じていたので。死刑の復活は武士が力をもち始めてからです。文字通り、まさに「平安」な時代でした（実際はいろいろあったようですが）。

平安時代がずっとなかったわけではなく、死刑がなかったのは八一〇年から一一五六年までの約三五〇年間。正確にいえば死刑の「制度」はありませんが、死刑は執行されず、天皇の特別の命令によって、刑一等を減じていたので。死刑の復活は武士が力をもち始めてからです。文字通り、まさに「平安」な時代でした（実際はいろいろあったようですが）。

「あ、それなら聞いたことがある。でも、それで漢詩なの？」
 そう、これも漢詩です。孟浩然という人の『春暁』という詩です。

「春眠暁を覚えず」
 「ああ、それなら聞いたことがある。でも、それで漢詩なの？」
 そう、これも漢詩です。孟浩然という人の『春暁』という詩です。

貴族たちの宴会などで突然、「酒」とか「花」などというお題が出されて、それに合った漢詩を読みます。自分で作れる人は作るし、作れない人は日本や中国の漢詩人のものを読む。そういう場面が何度か出てきました。

ところが、平安時代に

平安時代の文化を、学校の歴史で「国風文化」と習います。その前の奈良時代は「唐風文化」。日本独自の文化はまだなく、中国（唐）の文化を輸入して、それを我が国の文化にしました。使う文字も中国から輸入した「漢字」だけ。

「国破れて山河あり」
 こちらは杜甫の『春望』という漢詩です。平安の貴族たちは、このような詩を大量に覚えていて、宴会でお題を出されると、その題に合った漢詩を思い出して歌ったり（朗詠したり）、あるいは自分でアドリブで作ったりしていたのです。しかも、彼らが詩を歌ったり、作ったりするときは「国破れて山河あり」という書き下し文だけではなく、「国破山河在」と、当時の中国語でもしていたようです。

これはいかがですか。
 「国破れて山河あり」
 こちらは杜甫の『春望』という漢詩です。平安の貴族たちは、このような詩を大量に覚えていて、宴会でお題を出されると、その題に合った漢詩を思い出して歌ったり（朗詠したり）、あるいは自分でアドリブで作ったりしていたのです。しかも、彼らが詩を歌ったり、作ったりするときは「国破れて山河あり」という書き下し文だけではなく、「国破山河在」と、当時の中国語でもしていたようです。

なると「ひらがな」や「カタカナ」などの仮名文字が生まれて、日本独自の文化が生まれました。

「ひらがな」も「カタカナ」も、もとは漢字で、それを変形したものです。「ひらがな」や「カタカナ」ができること、日本語をそのまま書くことができるようになり、それによって中国とは違う独自の文化が生まれたのです。それを「国風文化」といいます。

しかし、これはいわゆる「純・和風文化」ではありません。貴族たちはあるときは仮名文字を使って和文も書きました。漢字を使って漢文も書きました。

そして、漢文、すなわち当時の中国語を使って唐や宋の人たちとの会話もできたのです。

ちなみに仏教は、当時の最新のテクノロジータクノロジーで、貴族たちは和歌や漢詩を詠んだりするかたわら、仏教という最新のテクノロジータクノロジーも理解して使っていました。

結婚相手だって、いわゆる日本人だけではなかったようです。

いまでいえば、パソコンやスマホも駆使すれば、英語もしゃべる。奥さんは外国人。でも、日本文化にも通じている。そんなグローバルな人たちが平安時代の貴族でした。

▼漢詩としての「正信偈」

言語に限っていえば、平安時代の貴族たちは中国語と日本語のバイリンガルでした。

漢詩でいえば「国破山河在」を音読しただけで意味がわかったのです。この「音（おん）」で読むのが、昔の中国語の読み方です。

平安時代だけではありません。明治になるまでは、貴族だけでなく、武士たちやお坊さんたちの多くも、中国語、日本語のバイリンガルでした。ところで漢詩（唐詩）は、一行が五文字か、あるいは七文字のものが多くあります。

五文字はたとえば「国破山河在」、七文字はたとえば「葡萄酒夜光杯（葡萄酒の美酒 夜光の杯）」。

五文字のものを「五言（ごごん）」、七文字のものを「七言（しちごん）」といいます。

バイリンガルの人たちは、この「葡萄酒夜光杯」を「ぶ・どう・び・しゅ・や・こう・はい」と音で読みました。ちよつと声に出して読んでみてください。すると、「あれ、どこかで聞いたことがあるぞ」と思いませんか。

お寺によくいらつしやる方、いかがでしょう。そうです。

「帰命無量寿如来（きみょうむりょうじゅう・みょうらい）」

「南無不可思議光（なむぶふかしぎこう）」から始まる「正信偈」です。

「正信偈」の偈（げ）というのはインドの言葉で詩のことを言います。「正信」の偈ですから、「正しい信」とは何かを親鸞

聖人が七言の詩に作って下さったのが「正信偈」です。

おそらくいままで、何気なく聞いたり、あるいは一緒に唱えたりしていただと思うのですが、みなさんも古代中国語を声に出して読んでいたのです。「でも、あまり意味がよくわからないなあ」

そう思った方。当然です。意味も教えてもらえず、英語やギリシア語の詩と一緒に読んでいたようなものなのです。

しかし、「偈（詩）」というのは不思議なもので、意味がよくわからなくても、何度も何度も唱えていると、その日、その時に自分にびつたりする言葉の意味が突然わかったりします。

そうなのです。漢詩を読むときに大事なことは、細かな意味を知ることではなく、何度も何度も唱えることで、それをしているうちに自然に意味はわかってくるのです。しかし、せつかくなので意味も知りたいという

方もいらつしやると思うので、次回から何度かに分けて漢詩としての「正信偈」として、お坊さんではない安田が、一般人の立場で「正信偈」を読んできたと思います。

素人の読みなので間違いも多いと思います。どうぞ寛恕を。

さて、本文は次回から読むことにして、今回はタイトルの「正信（正しい信）」です。

これ、気になりますね。「正しい信」があるということは、「正しくない信」もあるということではないか。では「正しくない信」とは何なのでしょう。

ご住職にお尋ねするといろいろと教えていただきましたと思うのですが、仏教の素人からすると「正しくない信」というのは、それを信じてと危険なことが起こる「信」をいうような気がします。その最大のものが詐欺です。「オレオレ」という電話の声を信じてしまったら、「これをするともう

かりますよ」とか「これで病気が治りますよ」なんていうものを信じてしまったりして、大変なことになってしまふ人がいます。

それが「正しくない信」ではないでしょうか。そして、親鸞聖人の時代にも、さまざま「正しくない信」があつたのでしよう。

そういうものではない「正しい信」とは何か、それをいまから漢詩で説明するから、ちゃんと聞いてね、というのが「正信偈」なのではないでしょうか。

ちなみに「正しくないものはわかりやすく」、「正しいものはわかりにくい」という特徴があります。

「正信偈」の内容もすぐにはわからないかも知れない。だから、詩（偈）にした。リズムがいいので、何度も何度も唱えることができます。何度も何度も唱えているうちに何となくわかってくるのです。《次回に続きます》